

全力で取り組むから、自分と仲間に誇りを持てる――

野球帽の下に見え隠れする、少し日焼けした笑顔。現役のソフトボール審判員として、また選手として活躍し続ける鈴木さんは、82歳を迎える今年も、グラウンド中に元気を届けています。

【無いなら自分で作る】

河川敷に威勢よく響く、アンパイアの声。40年以上続く市内初の女子ソフトボールチーム「つくし」の発起人である鈴木さんは、現役の審判員として、また選手として白球を追う傍ら、市ソフトボール協会常任理事も務め、競技の普及に努めています。

「中学1年生から、ずっと熱中していたソフトボール。子育てが一段落すると同時に、やはりプレーしたい思いが募りました。でも、当時



市内には女子チームが無い。諦めきれない私は、無ければ作ってしまおうと一念発起して、

昭和53年に『広報しまだ』で入会希望者を募集しました。すると1週間で、36人も集まったんです。自分と同じ志や境遇の女性たちとボールを追える。想像するだけで、嬉しかったですね」

「物事の白黒をハッキリつきたい性格だから、セーフとアウトをキッチリ見極める審判員を、ずっとやりたいと思っていました。でも、取得した資格は東海地区を担当する第2種まで。全国で活躍



生涯現役を目指すソフトボール審判員
鈴木 ヨシノさん（旗指）

【家族への感謝が第二】

チームのまとめ役として活躍する一方、心には常に審判員への憧れがあったと振り返る鈴木さん。その夢への挑戦には、自分なりのルールを課していたと話します。

できる第1種への道も拓けていたけれど、遠くに赴きたくなかったので取得しませんでした。今も昔も一番大切なのは、家族との関わり。主人の協力あってこそその、ソフトボール人生なんですから」

【グラウンドへの想い】

キャプテンや監督も歴任した鈴木さんですが、チームで担ってきた役割は、それだけに留まらなかつたと、懐かしげに振り返ります。

「つくしはこれまで、県大会で2度の準優勝を果たしました。私はといえば、チームメイトが練習や試合に集中できるように、保育士になったり料理人になったり。忙しいけど、その分親しくなれるので、苦にはなりません。ソフトボールは、人との繋がりが心地よいスポーツ。チームは私の居場所です」

年齢を重ねても、球場に赴き続ける鈴木さん。それは、審判員として成長し続けたい意思と、競技への愛があるからだと言います。

「最新の平日まで、ソフトボールに携わりたいんです。そのためには、健康を維持して自分を整えておかないといけない。だからソフトボールは、私の元気の素ですね」現在は75歳以上のクラス「スーパージニア」に所属。冴えたジャッジは、これからも同志に親しまれ続けます。



大井川河川敷グラウンドで審判員の講習会に参加する鈴木さん（左）

Shimadajin File #80

Story 島田